

70

65

60

55

50

45

萬葉へ玉の猪

四

木2  
543  
4

詞瓊綸四え巻

や

○やのあびも。紐鏡の中のり乃ほは辞を。一の表に此等三階邊す乃  
が。ぞのや何の事ハ。あびの辞はトキ中少。や何をあひの辞を。あふづくノ  
いともやうきあかへー。かみどくあらハあれいとぞ

○動うるみてあふや

くふゆ。ミテシテアリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

アリ

アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

10



○の日

日ナヌ あきや このあすかは門のづしやかふみ簾うすあめをとめざと  
いせ 過度 こきや この天のそぞろと べくをあみまつたてとうり

又

金四 そりまはまおは葉まくはよなごや 小生ひのをほじへる  
磐来 みをまくらひやまくらをひまくじのとほきせぬ地や まうがさのまく  
しまくはそのまくら まうがまくら まくら まくら まくら まくら まくら  
ヨソひまくら まくら まくら まくら まくら まくら まくら まくら まくら  
わ いも川そしや まくらにふ秋の聲下はい。のむねのゆふうが  
お あやのまきうれいふとへくまて 前まくらに地をまく秋をや  
て下へも見もて秋の声と てまくら まくらを上ものまくらをやまくら  
よ秋うん秋の声のまくらと まくら まくら まくら まくら まくら まくら まくら まくら  
え、

ふ たれしゆよゆべんまことまくらばこきや 故まふたへならずりと

引ハ ひまきわをわうおおを や ほみだりつひよハ壁への處とあり人を  
日ナヌ 先づりしでそしや まくらととじうみまくらとほよまの月經  
あまくらやの旅もまくらまくらまくらまくらまくらまくらまくらまくら

○ひひをあて結ぶや

後ナヌ こきや あゆくもくもくもくかまとつまくまくまくまくまくまく  
日十七 離波はまくらとみつの浦とにこきや このまくらまくらまくら  
後ナヌ あぐきあくらむとせやきつまくらとむくらや わでのふゆ乃と  
金三 东城をちよひびづりうち月は約かこといや うふまくらまくら  
彦十二 ふづくの麻まくらとまくらを行ひあそび月日や まくらふまくら  
日四 秋の夜お月や そく あゆのゆく まくらまくらまくら

○みのを四

〇二

曰云

かくやき秋のうへりや もつひ オウヘナタナラリシテ

曰十

ニヤニヨヒテヤ あらヒキツツの山 タモトモクニの下を

曰十一

うつみおもてゆ よまめりおあ ほへにぬ神を人のよみと

曰十二

うかとおうて やつひるやこの夜のよしもとなく人乃とめは  
はうハヤミカんとソヌミホリハムアサヒモチカドモ  
アヘテキタマハキテヲ機と異シぞの物のうじをおもハ機わ

○切ノヤ

度のうだ先あがくやき

古古

あらすく麻ぞちー御をえまへーおのぶ生せのむとよひ

ほ四

歌あらぬ正が三山べりほそきと本紫がくとれむきはきこ や

度五

こひやとれひやふどくあなまきいふぞゑが神をすらぬ や

曰六

うやうみの浦八うつ見じきにぬのむとまはまて や

曰土

あら本はとをなるとせ持ふとリのを布しよひご や

曰十六

三とふりぬハキサムアキナリトスルモキリホんと や

曰十七

駆波がくみドウヒテキのゆーれきとほるでけをもとてよと や

曰十八

ひりひりゲ やみのをひのむと松翠アーテヒトモビ

詞一

ちう花と月ととは美アカゲルもと や

詞十

神かーと月かととは美アカゲルもと や

詞十六

基のゆーとくアリトスルモキリハキリぬぞうえでく や

詩十三

きく やいふのえきゆーとくハキリぬぞうえでく や  
くきやいふハカヤーれきと松翠と異てキヤモキレシムホーチカ  
トテハキヤヒシモドロモキアヌアリの墨ハヤムギ  
トスナキハブキヤヒシモドロモキアヌキシムホーチカ  
トテハキヤヒシモドロモキアヌキシムホーチカ

彼のいへ 牧えヨードモキダニラモ切うもド社アモテアモカクス。や  
三咲葉ノ一役をぬきぬきあくさん。や ちるやゆも雪扇ノトメモ  
なげてんやとゆて文太もあくまであくじとされ。

又

かく本咲カタの下まくびがふきすれり。や ウツモコク  
大和傳 さきハきは書くとてきえぬと。や 立之見た取ぬつてて  
海夷 あゝ波をあぐゆきうりあじくと。や 実の事アヒカムに  
件のまごとのごくあるとぞ。そと仰うきハまれ。さうばつてや。あくくハ  
切きくやきり。又やとひて切ててと。文あハあられ。さあハえうてば。  
波浪理ハをきくとゆがり。や井音有りハ時事のきりまくつ。ばおやハ切き  
くとゆかれたやとゆそつとは波浪理ればい。シ。さうれまきとふぞう  
定めうのくものと金くヨド。あらわ。然もとありまくつんくきてこ  
そつとゆふらん。延べとゆがとゆそ。門とハラぢめらりとゆくの。又お五を  
六秋の波をもくひととてや。八月の月の熱にこだしの風。おもろまく方波のよハ  
月えよくてや。七月の風アリミナウハラシ。かね野雅曰利。きよと人のまごくむ種

えやえす。うハらきくとまう。まうとてやとツレて切う。切てハいふ。余  
きえむ切きみハヤの波アヒド。さかくにまう。ととまくとぞ  
あやとせ船ひのや。波のさうぞ水をみて下をあらぬい辞。すく。海  
のさうぞ水をみてかうとの二つみて。がのく上より多く言ひ換り。定めう  
わ。あうがふくやの上と。かうにほく格の辞よもと。とくせん  
かまく切。やの上。大切く格の辞。とりあうが定めう。ほく格の  
うち。切く格の辞と。おだのほく。かくにほく。のう  
のもの。かくにほく。くい。が。まく。さてをめぞにあくやの上。でく辞  
うかずく。たとえも。おうが。まく。ほく。ほく。とくきぬき。あくふ  
きく切。やの上。大切く格の辞。とりあうが定めう。ほく格の辞と。  
きく。二と。ほく。とくきぬき。ほく。ほく。とく。ほく。とく。ほく。とく。  
ほく。ほく。ほく。ほく。ほく。ほく。ほく。ほく。ほく。ほく。ほく。ほく。ほく。ほく。ほく。

べ。ありやあやといひすまうて。あらやあきやとひいふをひく。  
まつまの在りそぞぢと舞。からかきはゆ。そほくし。お後後ナセムシ。おさば  
つまきんも。うらやともあづきのきとあわすん。こゑが。ミリヤ。とみ。ば  
様に風碓をも。又あきやあらきやあらきやとやしにきやとソダ定まつみて。  
山あやさりうり。又あきやあらきやとやしにきやとソダ定まつみて。

トロト「やあらきやあらきやとひいふを。又ひどやきりどやあどやさんにひや  
く。「ハサウメ。スナヤキ。ユハ。ハ。ビス。ス。ア。ヤ。ア。」  
ソダ定まつみて。スナヤキ。ユハ。ハ。ヒ。ス。ス。ア。ヤ。ア。」  
ソダ定まつみて。スナヤキ。ユハ。ハ。ヒ。ス。ス。ア。ヤ。ア。」の右端に中折とを以  
て三段とて。音の長めに引て。望やの上をみをたの格とんねを。  
アベーとて。音の長めに引て。望やの上をみをたの格とんねを。  
アベーとて。音の長めに引て。望やの上をみをたの格とんねを。  
アベーとて。音の長めに引て。望やの上をみをたの格とんねを。

アラヌメ。アラヌメ。アラヌメ。アラヌメ。アラヌメ。アラヌメ。アラヌメ。  
アラヌメ。アラヌメ。アラヌメ。アラヌメ。アラヌメ。アラヌメ。アラヌメ。

○やをまゆる換くもぐ

古一 年はけらふまひ其がりと一とせをこそと やいもんこと やいもん  
古二 美みくまきかくくめゆくはあやいをゆな人 やヨミをゆく  
古三 トトモカノ苦ねあくびてうかかう やうへおーよ や美  
ほきま わらわそといふもうてうなぐさんば やあきるき やあき  
古四 水やうきそ やまざす河うきをあやどももむかふな  
古五 志やうこれ やれやれきんたとちを美くうつう宿てうちをてう  
古六 月やうぬち やしづけもくしむあ葉をくのハキのオリて  
風一 壮麗やあかまく やうずりおこしむなあトおもねおもねくもくね  
古八 えぞうくぬくもくもくよ金らうばあ やとくと人 やとくと

古一 美やうき花や あきときうとがんまじくわとあくともきう  
古二 あざやあんきや せんとの川暮れまゆのむすめりひやらん  
古三 石やうんあや うんのうよひかあれ板戸もううづ林おも  
古四 ちの川かくようきくようづるお葉は橋をう やうべ や  
古五 ますとね やあひぶ や ふ うそまほ前とまーあをすのえ  
古六 タ着うり食かくようきくよのあひ やうべ や うもくか  
古七 めのをと やいあと や はふ はかねひまくとゆーゆもへる  
古九 ぬあくひもづきあくしんみやこひがく人をう や は や こ  
又

四四 やくへてやまかん近づくゆきのあいざをあづこまゆき  
四七 くしてやあやあらんみ吉安あ荒木生がさなくすく  
日九 えくへあうどにあくやうがまゆまよつとがもりて。二つのやをもくして。一の  
五七 無びり。たゞまよとりこきくみハ此格也。又

ナセ こきやゆゑいづきうつていうねはくとひじで毛毛むべきう節  
四六 あとハヤとかとまゆうりたゞレ  
○やのとほぐく始

四三 わきとどゆくなどゆく。お神乃かは思ひお望くゆ  
四九 ふ強のとよぶの里へゆくわちを今津の山おもる等。やあぞ  
五七 かづりしりんじてづくらしくにあちへ乃そりき。やあぞ  
五九 おれ義がめま神ナカ事である。お毛上乃まおをゆる。やたき

四一 喜くすとたてる。やいづ。みづくせの吉生の山おもゆりつ  
四七 らへやあと。らへどくもへをきにあくにあくへやあられとどもん  
四九 かくとお小がれ。やいづ。ことうまみ神乃信子けむまふおお堂  
五三 おやさんおはあくとまじでみやこ。やいづ。まう。やあ  
五七

四三 うもくとおはさとがりのじききく花のうう。やあふつ。う  
四九 あがふきなう。お高井葉あくべのあく。やいくよあくん  
五七 おつつかみやこのや。いうあらんあよしあうお月をうるを  
五九 おきうすあ。や。いうあらんあくくん今へまゆとゆふあゆを

又

説書 みあがくからうとうけぞ岩代乃ね や しゅきうち 結ばる。すん  
ことハかまをもさりそへ一

又

説書 ちのむせにのうや きみのゆ向ていそじ生田のりつむらゆ  
こまへいのうやまのたむきぞとかまきをやぞ下へぎりがび  
す。

後三 痴がつめのや ひづとぞ まくきのゆーあき宿とらむぞうゆ  
卦子 みをかかく や ひづとぞ まくきてあおき ようむちつくね  
卦子 まくきやくらう や あみぞ ねのせはまか年毛河リシとらむを  
美 まくきハそをゑ。

又

後土 なまくがり うがもと麻えとひのをちうかうりのあ や なまく

出れもむかう。二のまえ様のむく 金せうきへふべー

説書

きくや いふ うきよをあす風ふきまわるあまくは  
ことハ切くやすすりし上のむす・やの等一 ぬまく、

○などやあぐや

風十

陰陰聲

うきくはすくべがわきまち風めたがゆくへうむなど

や あまく

千二

などや

かくまともまく

みくにちえぎ。やがまくとへまくまく

や

六帖

あいぬそなど

や こちをせきぎんふいど、うかうにあへぬ

や

後十

あくまも

や あらのそく うん苦せあやく うかく

や

卦七

夢はうそ

や うへあむもみづのあうねあまを引くまゆ

や

後八

清音生

うるまくあく清生をきくなかよー人のあそ

や まく

かくあべうへるをむきのまうせう海ひづん  
けうがあざやうてかくし下へはそとハモモミのま

たうとほちお下へま。かとあう例きふものどくなどとあそとの  
ニコのこやとあす傍あり。その中にあどハかとあうがるむへて。やく  
あもはとまくわ。なぞハやとあう例のこそ。かとえことさ。

○あふまよやひなまやきどハ別み下のきやの像よ出せり

○やとれきのや

おえ うきーに花まらむか有し葉うつふ秋みのちんと や  
日士 船乃西船やつへとてくじつむれきのまかとよきと や  
日吉 あらまぞうりあまねくひやうえぬぬり や 高一からへき

日十 離波ぐめりつじ草の下へおもとへもとをよき や へづつ。  
古一 えのこ や 人トかくさん。山はうすもあくおおてあ。とあせん

古一 くよこばぬ月ハおもぞゆりあま まえびはうりを差とえま。 や

日十 あらまぞうりあまねくひやうえぬぬり や 様のうへははくさり  
後古 小左道 きりま。 や うねとくきをもととまくとおもとくおもとくおもとく  
まで や いとまみや。 や いとまみや。 や

千 りうまとおきぬへ船のあだうりやうんぬ。おひいケキ や

詩ハ 嫩芽ノシモトヲかきし 茎葉上の草を飛見とすりひきや  
葉せ  
衣の玉 いあへもありひきや さうとかづくまきん地と のをま衣を  
お三 かりかくとくべくりうど や 秋のせめまくと袖一目とするべ  
お吉 ちぎりうきや あぬ日うちよ高木きつらつきばかりがくとまきとハ  
古大 ありひきや おおむきにむろへと海士の繩とてゆづらせんとハ  
辰十 たりひきや おおむきにむろへと海士の繩とてゆづらせんとハ  
古六 うきとてハ美うとがくすありひきや まゆもみてえとんとハ  
辰子 春は東乃美のうらふとありひきや えをき宿をゆきてうんとハ  
おとて引ひきやのやへ是やそのきん。そぞ引ひきやとくへをかくばぢなと  
ぶかへきとくとすかくくや。そぞのとくわむと  
弟坐 ありひきや あらのうをほどじかくゆきとて腰かあんと  
おのの

一  
又上<sup>二</sup>を上<sup>一</sup>ありひき  
辰去 きうちこちめんをまれゆふ里ナアお處せんとハありひきや  
千十五 うれんをあべーとハありひきや とがあくらへもとがくらん  
又上<sup>二</sup>とのうをもと  
弓十 年たまてあるべーとありひきや 金ありと供奉のやふ  
又上<sup>二</sup>を下<sup>一</sup>ありひき  
辰去 かけとくみがおほうへとありひきや うん年暮の先をえととハ  
また<sup>一</sup>ありひきやハふ一 おもし<sup>二</sup> おもすそ思ひよハ今のうき  
て、まこと思ひよ。つまことおへる人をうへてはゆ。木の機の中に思  
ひきやくわくきを。おもすとよとよあらうおううおううおううおううおうう

○ やも

- 古一 喜び事乃至ハヤモト、シテ皆是矣。せんて極よ  
日二 吹笛をなまく。シテ是よ。ノヒモハヤモト花かのす。  
日八 りうと吟歌で、歌よきりくを秋のあきハ勝く。やも  
日十 かくあき色なきパンダにてそまつに。是あかすの。やも  
日十六 跡とさくばう。アソコ唱く。是はるんとまつゆ。やも  
日二十 そくひあき側。やも。さくべ。川乃清き水か。すあそ波ハ流て  
日二十四 時色の道秋。やも。人のあきべき。ある波下。すまく。こきりのを  
日五 ゆくがくらふふをの。やも。姜といそん。そくき世をもつて。そぞを  
屋内十一 かくとぶふえ。やも。いとまお。色葉。片へし。とまはかの。の。ひを

全八

はのゆけまろ。やも。人生。うぐ。忘て。を。ほ。と。思く。ハヌド。ト。

山賊。いとくそ。吹笛。やも。あじく。き。せん。か。と。そ。ふ。やも。う。ぬ。

おののく。ハ。ま。中。に。か。く。や。も。。故。び。や。と。日。ト。  
いとく。下。さ。く。ハ。み。る。か。く。や。も。き。う。

古二

ちく花のあく。か。う。と。地。な。ば。ま。う。じ。ま。か。が。う。き。や。も

日古 いのがく。あく。か。う。と。地。な。ば。ま。う。じ。ま。か。が。う。き。や。も  
日八 聞。う。た。き。ま。む。お。よ。ま。く。人。を。あ。う。ふ。か。う。さん。や。も  
日十九 叮。しきん。人。を。そ。と。お。か。り。を。あ。う。ま。く。や。じ。く。か。う。き。や。も  
日四 え。と。い。だ。こ。う。だ。を。う。ま。れ。れ。れ。れ。や。ま。を。き。こ。ち。よ。き。や。も  
青十五 故。あ。く。ば。う。經。ま。や。も。よ。の。中。に。い。と。か。う。き。ハ。う。き。の。ま。れ。ま。れ。

日記

月へも やも 月へうのとひやせんむづく村家の軒内ゆふと  
山のやをは見てまきひがみ。下へてくまきど。ほじきてへるをもと  
のあだ。切望てことをある。やも

チ古

人げでハモー色 やも とよとよやさん見せがやるふたりすすりを

シカハやとく切里るをととえてアケトウ。残後残ナセ好太わバハマハ  
ミミバモト安ゆにあめかくはまくわびなやもばやくらむた。歌島のやうをを  
傳うる事や こよとわくまききよく

又一格

吉一

月へも 月へうのとひやせんむづく人のあくわおのれ やも せぬ。

月二

月へも 月へうのとひやせんむづく人のあくわおのれ やも せぬ。

新

月へも 月へうのとひやせんむづく人のあくわおのれ やも せぬ。

新

月へも 月へうのとひやせんむづく人のあくわおのれ やも せぬ。

新

月へも 月へうのとひやせんむづく人のあくわおのれ やも せぬ。

日

黄うわ も宿村若乃しろこまいたもうれふのやも やも せぬ

月

月へも 月へうのとひやせんむづく人のあくわおのれ やも せぬ

○四のを四

○十二

あきこむなはよがくやをあり  
かくやをハ

後高  
十五

ますとぬ人のやうのは忘れをもんじんへやにまつや  
まべくやをハ。やみを麻くのとて。本ハシヤとのいふと  
ゆきし。あふたハナリ事とまことにやオヤモト通りていて。あもと  
とりもと日ト御上と後共おきてハ。やハシテ教ひの辞。やモハミ  
きがおもへり。御上と後共おきてハ。やハシテ教ひの辞。やモハミ  
のへりへり了辞。別うが風くさや左よ今どもハシくこれ  
をちうて。やとおまやのいとへり。  
万葉歌ハとを保てやととて。二三のとと。やのとと。やとのとを  
保てとあり。萬葉あやととてハキモヘドモ。九の毛ホガリガリ  
えり。わとやとえり。あぐわのとてハキモヘドモ。ハキモヘドモ  
らやモリヒス。

○ や

古口

古口 おの川お葉を松ノヨリモや もよがくつを松ギや ま。川。  
日 久 月のかつとも秋も葉もお葉もや てとまくとん。  
月 十 夕もばくすよりきふりのや 光るや 人のつむぎ。  
月の 塩すね海ときや や よもくもぶだらめや して年のへやくん。  
古十 古 ひつゆきや 人のこへづん。美とあつせをぬきとくを

まく  
おのづくらぶやや とくを

千十三 うきあくすとおそれ一社とくらむをゆうや 人のよもとへき。  
万十 あうどくもあらうもんそりくや てきかや 無が西や すれどん。  
六非 いせあく 秋の夜乃子夜を一よみをぞくへと八分夜や かくのあく。

古

ひあてりそくや そくん。神事のふきをどそすあら葉のす

後後三  
翁山句  
子内侍  
集

あらもうへ枝ふわくよはうる花いそや そくん。たりよこみを

のうかしんをや あくまむとゆひに心をもくねあくまうぢうるを

集

たのあくまむとやハヤト以下の方の切。而へうつて。かあえてそれば。くまむ  
おじ。れうむや人よみとえを。きハねうばくよよめ尼をべきうし。きあたやゑが西を  
ま直(ま)んハきみをあが面とすとまんう。ハチモー林をやうく時のあると  
ハチモー林をあくまみわくまかし。制(せき)しやあくまんハ制(せき)をあくまんう。ハ  
あくまんハいもあくまんう。別(べつ)をやあくまんハ制(せき)をあくまんう。ハ  
のせやとそに思(し)ん。是ハ業(わざ)べといひて。やをハおきとまくわざの秋(あき)の舞(まい)  
比(ひ)辞(さし)ハちうへ例(たと)へ。坐(す)上(う)かくば。西(にし)きうはかせ(せ)り。又(また)か戦(たたか)ひ  
をやまくさんだを。こがきをむかへ。座(す)おきや。舞(まい)。きハおきる方(ほう)のうをら  
くおひて。揚(あ)げ。けうちそハギ(ハギ)をやととのうをまく。き。下(しも)の制(せき)とくわ相(あ)ま  
ハギ(ハギ)をやと写(う)へ。一(い)やまきうをまくを。

○おのかふれよとのたやうり。下(しも)の難(な)やのせり。歩(ある)き

○老(お)や 老(お)やを 老(お)やと ら老(お)

老(お)や老(お)ハんのまくうる舞(まい)。老(お)やハんやをのまく。ひととも  
まくうるへうてまくうる角(つの)。

古ス

シテアラ老(お)バ秋(あき)るき時(とき)や。あらがうん老(お)そちうめ宿(しゆく)へうき めや

月十三

うれおもうへうへぬお乃(の)よ。舞(まい)をあひつへそとあひつで めや

月十四

秋(あき)きばふくまくままで。四(よ)幕(まく)うしほれふうり めや 独(ひとり)ゆきあら

月十五

こりや うは思(し)ふりのかくも。うへーは。四(よ)幕(まく)はくらまくれつ  
お一  
立(たて)めや 何(なん)をまにうじも。ばくも。おせの。あの。河(か)きがの  
立(たて)めや あきと。おもと。ねむ。ひしよ。うしよ。まく。あひばらハさうめや

日十  
佐十三  
古美威  
後古十二  
定あり  
メ  
みよしめあらのきお若きのりみかぶりとぞせざらひ  
めやも  
メ  
タキヘキトキモトメヤモト思へば一めへなむ人のくわうきりきを  
めやも  
メ  
シノ内乃吉のまたのあすだみ人乃もくじくがまひ  
めやも  
メ  
あさ枝乃き本のくわせきをねまほをかけてわがこひめやも

メ  
一  
メ  
めやも  
めやもハ多集にてたか一めやもと同様に万葉ハめやもと「アキ  
セイシカ」  
古十二  
はのまけをまはの河一せをとくふ志がきことくめやも  
ラめや  
及十八  
あくにひふトミムカニタニモセシガホトミモセガホト  
ラめや  
佐  
メ  
あらめや  
オトモ人老をもとをはまくさまくハまくさまく  
ラめや  
ラめやハうんやとのまより

○ そ や ふ く ま

古四  
秋の早にあくそく處ハおおそや  
メ  
黒ハあそく人そゆりに一あざ  
メ  
くべきやどくとくまは  
メ  
いせの海うしおをまく海人かきをあまや  
メ  
うれまく下をまきて聞かまや  
メ  
きがきよみふかくまくかくま  
メ  
もぬの阿また音やき衣のまくをあくとまざわあま  
メ  
ナセ  
まそそー時より風とくらむとくまそそ  
メ  
十八  
きおひもにかくと月のうれすりあまや  
メ  
絶を過てこと

（五）

後  
口八 天の川をは、さかりにどうらみきや 墓るんまきよふとせぬ  
口七 あくまのまやくまお小川木枝もげ きや 日れ先えぬ  
千十 あがつるまうみのーのめ人をきや きがまの祭神もんじが下す  
古十九 おのきやハ祭もんじをかやとくまし。ゆくにそのかを農きむきやといひ例も。御事  
せき事 つひかやまき。みめをまこと霧きそまかくといひ例も。祭事はかたもてひにあり。  
御事 沢民 あやまくま。神主のまくまにあくまきや いきまくはおめくまく御神  
三三 あやまくま。神主のまくまにあくまきや いきまくはおめくまく御神  
古十三 風あきを吹く川岩はまくまきや 根ふりうとてまきる。へらあき  
口十 うつあきうるまくまハゆめなまや うそとそろきぬをあり。む  
格云 わきまくはまくま人乃ぬまきや やがのまくまえまくま  
履根 うつあきうるまくまキヌキ浦うとや あくまのまくまぬもぬも  
口十六 金九 金九 まくまやううぬのまくまぬもぬも  
口七 まくまはうだ身にまくまうけなまきや まくまつまくまぬもぬも  
口六 まくまやううぬのまくまぬもぬも  
口五 まくまはうだ身にまくまうけなまきや まくまつまくまぬもぬも

日 シロハナド 神もほ見が黒きとや ルナモ波またの日ぞさき  
千セ 絶えとてよみのケルベキミラモ 月や 黒きへ若き衣きテタリ

日十 あきば又あみをきやあみをきとや えり月のあはくすき  
日十ス やまうぐむむりたあまう新あきとや いもト川奈の秋ノ月

秋物

花あきとや かふのとおねがうすらし ひよりまきのあくと  
夏下 きだきをばかくに 桃あくと 月や ちくはまつわづくらう

六物 うご人のあくと あくと作なきと 月や きのこのもあくとまきの武  
あの星やハキアキと あくと 月や ちくはまつわづくらう  
とその因よ。生れやるのときとまびてすらがおなきと。月をるやのとき  
を下へきて、かやの聲そぞらひを代アヤのときハ切音トハヤの聲び  
りく候。こきをりでがつべし。あまに引いたたのたまんをいあきや梅を  
すくしてくべつどす。ことハヒとまわるべ事のこそ。かきもあふ。ありやの聲び  
りく。物を頬赤まくおなきハ下を引くかき。てかきもくじつ改めてみ

日

日十七 あがとあがりてはくせす布あきとや トビヘニヨリ歌くとく人をあき  
日八 てのまふなとうそれいくとみ宿をきとや きくきん人のあづともせぬ

日九

日十 先くとば歎のとうあいかなきとや むきべた経済あくゆん  
千フ さきとくらむをぬる聲もひきとや ゆかをハもてかきーかくん

秋物

1 あうとくらむをつきハ月のあかとや さくとくまくはくのからん  
1 あのきやき。よもいと荷をくらふ船をかきて。下をそめぬびとくらむ  
1 まくらふ。やりををにえて見立だんむやく

日十九

日二十 ままうくゆふてぞうりはあみとや まも風をあきらてりほく  
日二十一 ねも歌くちあくらうをあみとや あぐふふとみ半へあく  
日八 神を月あぐくつうとつあきとや まふとみ秋乃みや人

同十七

ふうげおをまぬちく海もいりあ

生や

きくれでつゝ月もうとよ

おのとやハ告。上み伝をもつて。やそぞかくし。ありトハ何ヤの候ビテ  
かくつゝば。まくはりあれやハあるちだん。ソクシテやハいさきぞといす。

おおきほせ。『告』同ト辞の候。是て。とハおのく異シ。ト一せを。ハまつ

ひねべ。又かくと切きる。とよりて。ありもやをあくしゆく。

あくのうきとよくわきまへべ。

○太のかおをや歌島のやまとくまぐのとや行う下にかぞり

○やぞ

同十九 もくおくてはトあらイ城ゆ類ありかひとハありかさんやぞ

いちのあり住殿家。まよハヤそとあり  
チ。替え。ま。後機と。とくやぞと者

同二十 申にありて一乗船うりのと。表里も。おほおうりて思ふさんやぞ

塔幹 申中がもうね支りつゝみさだまけり。かくし。あきくらんやぞ

同 衣冠甚ばよき。き門も。まなぐく。有べき。のと。かくし。さんやぞ

兼盛 はくう。かいかく。新を。るるも。う乃。はくち。の。おまか。さんやぞ

坐 えきぬ乃。者。一。おぐく。色。冬。は。表。と。せ。かく。御。を。ば。き。り。んやぞ

同 とうか。かく。一。そく。い。も。かく。時。も。の。人。あん。やぞ。多。よ。と。ば。

ひ。や。そ。と。り。よ。く。ば。ま。歌。古。き。く。ふ。と。く。も。又。後。歌。き。よ。く。と。く。の。ま。よ  
と。も。べ。て。そ。く。ば。き。く。と。く。と。く。の。ま。よ

○やしつひて。まきくらん。と。ゆふ。様

後玉 うみう葉をぬきとたひきて。ちじつ。ね。さふ。『や』ゆうん。まくらん

式列のあをあ。と。ふの。おも。らん。の。お。あ。ま。れ。せ

○や。そ

つま。の。ま。に

〇十八

する 父がうと一本榮ゲトはうりとあくわとを やらん かづきもせぬ。  
又本 蓋  
吉のせうへ ぬどもふうけでゆくあづのとくを やらん ぬめきをす

まへやうんとすとやーき辞そ。あととえおとよーはなーき。今の人ことをうれしく思ふがんだし。おのよきおのじの言ふとも。ひぢにを  
そむーと歌せうて。

うへとよとときまでの像くハみか歌ひ乃やき

○歎息のや きりき なきと。後まへとうねひうきむとひのうかきて。  
まわうば。うれきふをやりうきあるもうとまうあもわ  
うてよてくよゆく感ずるあくふ。ちく思ふほくとまうせよ。  
あ歎息の声ある。今かりに歌ひのやうりしてゆきかてり。

古士 いへかとようりへに乃うう波のあくを や 人をかくこひぐくハ

はす ぬへどもふりくとくのうふあきへいを や 忍りたれりふうき  
辰人 よの中はつうふや うふ風のあせきくふとすハぬやかかへた  
おこ まへむとしかへや うれむたるふとすかくふりえやハとむ  
後 段 おぬあはのゆぬぬひく立ぬとがあやう深のうあう や うふ  
金八 うううううの宿の宿乃う波の波をかき や 神のぬきよまされ  
彦二 うみとや うきよ代ものいそひーうきよ風うへとおひなま  
日三 きうううおおまくぬをゆきぎれゆくあり や よバ乃一聲  
日八 うつとまうわが身はてや うみうつしよひやへの意とあり  
日十 人をうやうくみつべ や うむううとやくもくもくもく  
古九 かひが根をゆうくみつべ 次のと人あるがと や あくつてすん

万五 りぬうぶやきふとぐと。やみやこまでかうまきてらむうづの

金セ シナミむことぬまく一はうかともあをとぐね。や人をくみて

被衣 あまつまく海士ち色がね。やまとつ海の底乃ふ原もかくきよくべく

巻五 あう川のゐたのとえまかくれどぞうに人をよせ下船を。や

件のうだのやまを歎息せやうてこそく降きてむきへ向たる

あれだ。ばりとてお時流くまし。或とよ或ハふきとふ舞い又

うふくふきふも鱼ア。たのか古ニあきやま。日三やよやま。後

松ま三一しげやまく。河金三引。や軽風。あづのや。又ノセ。やくま

れやのねえをうねりや。あくまうやうひを。やうまき。やう

りやうり歌。やうめやう。やう。やまう歌のやもみみ日ト。

ま

万五 いふせんあるべやふくのまみ日。やよなのあしたのかくま一六  
金八 空くまこやかく人のあうきわきく。うのふがくまうや

千三 め月ぬとうはあづく。ふ袖ぬまてある。とやくの彼のまみひや

ま

云水 ひうき代うけぬをく。かぎくねばあをわづり。人のまくらや  
山中ハ中の。カトキヌミ。うそ。うそ。あふまく。うそ。うそ

ま

何十 納あく。廉のまくら。じめうを。おま葉のま葉の。うらがくのよや

ま。行ふと見てあく。ざまなく。おま葉を。うのま葉の。うすく。ま

同 あのが候りはドま榮やおそれす故まく因子の候めのオ や

同 アシギ候志のく小篠候クモほすらうるをのキル や 一束をかりに  
こやくハあかくいだ。とおのとつもつら。やと候す。サヘのを二つともみ  
きりきり

○もや けをハコのやくよじ

お六 無がましをせのあをゑ乃ゆくとからまくすまうえー もや

六五 東川 ト角み月きあレ せぐをとめハナラとのをもかくテ次モ もや  
死既 出をやさゆと古き辭アテ。方々に日本紀ナ 建葉年の附記ニテモヤ  
トス。モヤをときうれり。セのまた空御ノサギリ。又源氏物語ナヨ  
文子とカレ。モヤを者歟と歎せんハアムニムトカタミ。

○きや

後 え 申はうれりのあきや 人をめどかくおもきみえだ

同九 うふ人を志ぐとよハ皆月あきや ましもてえぞれむまづれ

同十 あく破乃いとふくとく破あきや ほきあき人ト からまくも

同十一 あきば小田ちますまいとあきや 苗代あをえふまうせ

同十二 伴のあひなふとお春ハゆきなきや トの花榮に風

同十三 有ひとありひかあきや まとまはしや とひとつあつめのま

六七 六候 わが志とせくとすまう里めうどか きや 人よみて年のへゆきバ

同四 いせ地 お乃處をまくわきくりのなきや うすに寄やちまくさん  
うすに寄やハありといま歎候やをまうき。何とやハありとまくわを  
あすと云て。何とやハ列る。何とやとやがみのまにうよう

同五 七九 あきは月あきや 不うぎと一ノ月のゆく方とそん  
き坂乃実みせきりとまうのきや 忠弓の馬を新をとみさん

新勅三  
落葉三  
新勅三  
落葉三

○みのを

○せ

〔後古十文  
物語〕 奈うどぞよびてばかりまたまさうにとふ人あきや又やましもと  
「あらのあとやハ何とわふを欲ゆのやを候ふにて。」とおとまを傳す  
日づけ同とやる来るとえゆ。そのも左風船ふ出まし

〔後古十文  
物語〕 おもむくおもむくにかれる月見きば時へとあきや

〔後古十文  
物語〕 時へとあきやみあきらをねゆきハあのとかのものにかくべりぬあり

〔後古十文  
物語〕 おもむくおもむくとうとし事にふらうふ。欲ゆのやを候ふにて。橋川屋うそのお  
ややりぐあくて個べうとしき。いきはくまればようくはうえいともねど。おき  
ま本多うべ時もひとやとえり。これもまか。○橋川屋そにうつてもんをこう  
おもむくや思ひな人を何ぢひきん。おハ「ものねびふされといふ下へやを候る。  
そつづなすぞ。」

〔後古十文  
物語〕 そべてあきやあとやをどいとさやハ経ひのやあとくもとへと  
て。上ふう。おもむくがめー。又欲ゆのやあとものあとく経くう。く  
まきとやまく。おのく。まちもとととく。味をうなぎまへきし。

○ そや  
○ かや  
○ そや  
三の毛ぞの終へとおき

四の毛かの終ふおさと

● 雜のや

一の毛や 犬の黒 ちふや そくわはひ せづきや うちわけ山

二の毛や 埋もてひ くとくや おがの浦

三の毛のとごひち。地名をまひりぬ。かたあくや。そのくつまほせり。こども  
上と下ふたぬ地名別れある。二つまほじりぬ。かたあくや。上と下は度くして下ある。

○ 三の毛や

○ 一のや

○ 二のや

○ 三のや

○ 二のや

○ 一のや

さすにあらだぬし。物ふくづきやちのひをと。かづきととうまと二ふとね  
はよむがとし。萬葉の内玉うるふし。接せたうづきやあやハ久年の名つ  
くうう。一キハ前やハとくの名をへど。父弟へりきり。毛づく

アラマツヤ いせの海ヤ 長崎ナシヤ なみを江ヤ

かくのそひて下へ地名をもひがすもつまうとす

志き鶴ヤ やまもと 五ノ木ヤ 雜波 神風ヤ い努

山あひとも。上枝はそ下へ地名し。左風と引ひづやかくのみうやかる  
どより。但くも雪や風を音にいぬまほこや。引づやあどよめ。をば雜せられ  
よりまほこひくはまよかび

又

志き鶴業ヤ 月ゆき業ヤ 月絃引ひうちヤ 雜波 神風ヤ い努

日萩の奈ヤ

まきわれてるヤ

山尾ヤ 松山ヤ

御芦生ヤ

山お

山お

山お

山お

山お

山お

山お

山お

山お

○のや 三の先のひりぬき

○一つのや

吉士 事なふとはふうくヤ みを

日土 土

月引ぎをき

ヤ 三月

日土 七月夷さとヤ 罠乃

日土

月引

ヤ 七月

日土 葉の戸をまきヤ 日引の

日土

月引

ヤ 七月

日土 ゆきまかやくヤ りの

日土

月引

ヤ 七月

日土 みのが先方あひてなくヤ 五月や三仲あみひのひなとしき

日土

月引

ヤ 五月

日土 花ちうといとひ一曲をき叶衣たつヤ ふそきと風をまく

日土

月引

ヤ 五月

喜慶モリヤ

や

あそきと山川乃いもをくふるまきとゆかく  
はやハれく船ひのやうそ。え衣をくわぐもそきと船ふぞりまちかゆす  
やうにいつしもや船をまつとつよこし。喜慶のまもあまこ。あふ下を  
やのめびよきとりしてことあまう。船どもばやはいと船く坐て。じらま  
せてば眼ひをまきがめくあふあだくくにせり。

○物二つの間ふをまじや

凡十七  
葛赤准規

なみと船く堀や

や

ね葉を名ふ船あそと社とハいくとへぐり  
はまくに船やね葉とあると。機織えも革革えも光儀輕便のう。又風雅八小後  
船船身製さむのこそ。かみへんと。機織のやふは船頭と小竹枝がまく。  
御とくみくべきのみどりや三八みやみどりとあんとそん又河ふた後う。  
詩とくまく。又船や船恒とハまく。童蒙歌よ久くと八月やえを  
とよとれ。あどう。もべてはや。今のまみハめぬくじむすれぢ。あま  
よをくらしうじやしきる。緒冊みかみ人を花や蝶やといで日  
と豆がひまばもぞもくら。源氏西行などと花やとふとく。おハ花  
よてふよとりとお用へと秋島のやうり。おうりの際うとく。仲のひまがも見る  
やひと日ド機とくらうとむがとくわ。

○をや あきハかくうるはくと船ふ辭し

古三

さ月こばあまくとゆうさん船ふまくにをとのをきをきう

や

後三

うくとく月と花と鏡はくわうとあまくんよえせ

をや

後四

あらうらん人うなせ

や

日十

あがれ乃をせふくわくしくも船不のちうき

や

日吉

日ヶ神を船のま葉うくべ

や

全七

ようともふむちく本めをぐまくえせ

や

又

おのかくせやくいきや

や

又

あきうだや

や

ま

○物のを

○古

えせかだや

やまとや

りきみや

やのまくあを上としかり。但し下にあると。上とあくあと大日。クレバそのもがひみのまきのむくくくくひ。

左傳と雜のやうとばともかく。下のめいがよかづべ

加

○もへてかもやうと仰る辭にて。やと通りしめてよれてもか。おふ  
美葉みやしりふべき和を加といつてよれか。それどよみし和やとよべ  
き和とみかづべき和とたゞふきよまを美し。おぞらにとづひか。  
十みうちゆのよのの脚とうひせ。味をくおのまこととん

計物 てとく川ゆまくはる乃秋秋もりふゆゑくちりくとあん  
万八 たひ方  
口 榆ふまくは本河の小秋りくふる人かふまきくちりん  
休氏 ふりすんきうけおどややよいふまくえぬ人乃きくあやまん  
士 おくふ乃麦けをふのまくち乃きくういもん主のふくまに  
かく いとびうしまく川をくゆをばくよるえゆくみまくく  
計二 かく川もく神聖のり新としてぐり咲くんふもまくの花  
計和 うまくべいく年はのこえやんみのそりふきくまくま  
源氏 うきへうぞくべくりくふあけちぎりくかきくまくま  
ちま おのうまくから。ほのかりふかせて。やよせいで。おじもやの様よヨト  
又

後八 起たりよとく月日音もくらまくすくもくすみてとく  
○おのを

考五 いつのまかお紫へやんみばくきのふ ウ 那のちくは、一月

日十 せをせじくそくうとく きく あくふへぬぞひもを入をかりき

右のまかのかき。皆ハヤの様よ同一こそ。やみへ西を。かりとせんと譯して  
ま。

考六 金をばあすかふとく きく かどわきやたきにあらぬあせん

後撰 土 てすみふう ありといすみうりう人く せめほくまねの振

日九 みゆきとり よふへやくせて今ハモアミの様ちくはありルを  
まのかも。すんのまくとハ上ヌ月トモ。皆ハモタレホ強だ

○切くか 洋のえう先にかくかき

古ナメ タキ化む人あきととをうちもひきんこめとさやく、あ身

日ナセ 正ぐうへり 高ぞかくある天の川 うきうきね乃くいのゑづく

日十八 叶中はむくすもやううくりさん正ぐりむととのことかふあや

後古 ほぐた名ふまにゆくへうくくとくもけ人のよけりときくハまと

日十七 めけふとふやうわく月れのぐきハなまにて人乃称なよあれを

古ス 秋の月ふべとやふとくせすをたのく。お祭の殿をよと

日 千葉よへらんうきんうどいづ半り多一。お御と古くまよしこうごとく

えをねきへり 関ナケうんうきとくハ万葉のまうり

古ニ 奉五代ゆくはなまくとく ちくとまな人へとくれ

日二 奉乃生おまのゆくとく ちくとまな人へとくれ

日十 玄々神をみゆくとく あけまくとく えよりはのゆ日ハキ

日八 侍うをせむるバの。とひハモラバあれすとく やくととの事

又お立ちのアラハ句はまことに  
えりあらんやうなゆゑ

えきりくをあそび秋のうき

うきやのやに秋乃波のしゆうせねうども  
□人の神乃秋きり

にえ  
うめゆくをうへるのむきをうちちう  
まきまのかづくまひ

おを。とばかりに神かえくを計りて

又

うとよ  
えり一面も暮るともう

卷之三

内  
因をあらましめり。  
う  
はくせんとくわくのこちく

日八  
せゆ  
あくま  
うれ  
あふぞと人乃そり  
はあくまへてきあま  
を

かくとよみ

もべて後の方のうちにもまとめて切るかの上より。づく様の辞より多く定まり。□  
又やの辺がいつねく切るやの上ハ切る様の辞より多く定まり。ことや  
とかとあ様乃うのを二例をいと。切るやハ。アリやうや。アリヒ。  
かもあきらかきりしりふ。アキハはく様の辞。又切るやハ。アリや。アリヒ。  
やとひ。かきるやうする。アリヒ。いつこの言を皆こゆの  
格へ准へてよし。経にのをやの辺の切るやの條を多くい。□

後括

きうをやあきのかと乃郎。云有レヒト。おたすドア。あく。

金ハ あそびとねりん女云ハ多出よ。承ゆゑいのち娘。人。

左一 みナ一聲。ベリノ聲。おう。墨若。

内六 及乃長付。とされば。ほそきまつり。一聲。おわく。あく。

内七 浦ちかくゆり。おはう。あく。おま乃。まつり。とぞみ。

内八 五ばとおきと。おもと。まど。はうん。人を。とす。あく。と。心。

右のうち。ハか。そ。お望。を。と。あそ。へ。まき。

○かをきや。格

内三 しそのえきに。あく。ア。おとぎ。を。きと。ウ。行。ゆ。ア。勢の。う。

内六 よの中を。差。ウ。く。う。ア。シ。ア。シ。ゆ。を。おう。じ。きて。あ。き。を。

後十六 あく。あく。と。お。う。と。お。う。の。あ。く。あ。き。ア。キ。ア。キ。ア。キ。ア。キ。ア。

内七 はの。は。う。を。や。う。に。つ。う。圓。を。あ。ー。ウ。を。へ。ウ。と。え。ア。モ。ス。が。ア。

内八 い。き。う。ウ。あ。や。ウ。い。ふ。ふ。り。ウ。と。お。う。ウ。あ。く。一。き。ア。

計ナセ。正。ウ。よ。を。バ。リ。ウ。ア。モ。ウ。と。あ。う。ひ。の。匂。内。脚。を。い。づ。き。た。う。き。

内九 たり。あ。べき。ア。後。の。世。を。う。ウ。あ。き。ウ。あ。れ。ア。ア。れ。ア。ア。ア。ア。ア。

内十 こ。う。ハ。二。つ。ま。う。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。

入三つと

古又 素。め。お。あ。き。あ。き。に。し。う。ま。う。素。ハ。花。ウ。あ。く。ぬ。ウ。股。の。よ。す。ウ。

新セ お。う。乗。の。室。ウ。物。色。の。ほ。う。ウ。と。わ。ぐ。も。ひ。ウ。と。お。み。の。た。く。ウ。

万三 う。つ。ホ。ウ。株。グ。き。ま。せ。差。ウ。と。お。れ。ウ。ま。ど。ア。室。の。あ。く。ア。

注。萬葉の。お。う。ハ。中。の。か。と。か。そ。そ。の。筋。す。し。上。下。き。二。ハ。ト。へ。く。か。

又。四。つ。と

古十 無やこ／＼痴やゆきあんあとひを姜<sup>ウ</sup>うつ<sup>ウ</sup>詠て<sup>ウ</sup>さめ<sup>ウ</sup>

井物<sup>トコ</sup> 大あり／＼姜<sup>ウ</sup>うつ<sup>ウ</sup>月たよてう<sup>ウ</sup>なき<sup>ウ</sup>ふきぢんを

けうハニツブニツミタリ

○かものこのか

後<sup>アフタ</sup> ナシのな／＼あもでうともぎかドを致り何と<sup>ウ</sup>人乃にき一休

ヒカラ怪のあくふ生て下へてくかそ<sup>ウ</sup>ものまし

サトハヌカセ<sup>ウ</sup>かうり

古十七 あいぬとてなどり姫オませぞききんふいをハラホル何をま／＼地<sup>ウ</sup>

持<sup>サ</sup> うたよきはそじうをソヤとそじきさんみ日も行りとハれし<sup>ウ</sup>きえり

後<sup>アフタ</sup> かくてのとやびへきりの<sup>ウ</sup>ちややぎりかとけすらけお代を尼ん

ほお<sup>ウ</sup> わくあくろかちうんぬの<sup>ウ</sup>クノマヤ八下たくらかうりてう<sup>ウ</sup>?

古十四 えととさばいぎくんぬ<sup>ウ</sup>とせひーおちもむかみハ奈<sup>ウ</sup>け苦<sup>ウ</sup>う<sup>ウ</sup>

古四 南の音波うきぬふとえてきの<sup>ウ</sup>月とまみを秋乃ふざや

○かと

古二 あふもえびあやうぐを一星セアニ<sup>ウ</sup>とどくふくべき<sup>ウ</sup>と

日四 ちぎりまんごくうぜつ<sup>ウ</sup>きたかど<sup>ウ</sup>年に一<sup>ウ</sup>とび<sup>ウ</sup>はあふ<sup>ウ</sup>と

履<sup>ス</sup>大 みちのくちをがらのぬを生かふみハうきとしまれあつくね<sup>ウ</sup>と

祖<sup>セ</sup> うきを外にあがの色も残<sup>ウ</sup>タをかづハ人乃くもうの<sup>ウ</sup>と

日十 玉がありとあくせとをきにう<sup>ウ</sup>とバ信をいぬりちもくの<sup>ウ</sup>と

十九 かう<sup>ウ</sup>さばく川とおひもあぐをよ経もつひよハとあくべき<sup>ウ</sup>と

古土 人見ゆうわと<sup>ウ</sup>あやみ花<sup>ウ</sup>さき野<sup>ウ</sup>ど田<sup>ウ</sup>出でて<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>も<sup>ウ</sup>ん

道二

主事の御名の

名

日 在 すぢかくしてほきまはするハシリ候とてたへぬ ウを おーきより、

チ 三

まちうつすゆとせきめぐれてもいまいくか クを おだまきのち

日 士

りくとやきじもつぎきねまく うを 繁のあづまかくとぞうく

○ 加のまづか

チ 三

行ふもまての日ハ神社あらう うを 新まきかみまづあじまん

カ カ

うとバキとひがむどう うを たむ人のかちせのあめ秋乃ト唐

カ ナ

花とふらふらむちりし、空もとをひそせざくニグリヒト うを

日 丈

いきまんじくわがゆにもゑむ うを トあくたものすこまん

日 丈

あわもまくらまくらまの下にあくわせはよでせかまし

○ 加のまづか

古 一

ほみぢりあめうりうけてあくまをかぶとらきよも柳 う

日 二

よひべきあとハナクにともかくそちひじふかみぐふひ う

日 三

ぬぬあば幸にヨリヨリあくまおぬてつとをとあがく う

日 四

けむるきは今ハアドとあり(ア)とよもとれつとまく う

日 五

えをアヘギ(ア)モアとハシルをとくとくよひひ う

日 六

うつまはくとくまく う 桜まくとくまくまくよひひ う

月 王 ちきみよトキモ人 の きをゆく まきみかめよハアヤ あう

月 ナニ うちつまく じくと ウ りみぢ柴も き宿ハタナカリ

月 ナセ おきぞのへ カレシト かのまね ト ト 社のせざきに

金 三 れんを まひく リ 生 の まどた あく まくに 病癒せよ

終 四 まひ 称 ま ハ 審 あ き かくめ や ど ウ 月の種せざに

○ かむ と ハ 色 ハ 青 緑 玉 と かく よそ

古 二 今 と ま わ ら ん も お 小 傳 の 傳 乃 と ま た

古 一 う り 山 き 尾 の う り き の き と ま と ま し

古 五 と う れ の か と ハ 傳 の ま と ま て と は と と と

古 六 そ ん ま の ま と う と の ま は ま ら 祭 め ハ や と と ま う ま く

月 九 王 の ま く せ り さ け と バ 真 日 ま ま 津 生 の 山 ア ル 一 月

月 十 カ レ ゲ 河 多 志 名 ト う な べ と 取 ほ く ア ま へ と き

月 十一 や 可 久 と 地 お り 人 の ま う と ま と か す に り ん

月 十二 秋 の 夷 月 ア ル 毛 を ま か く と あ ハ も そ ひ ば う ら か き

月 十三 秋 の 夷 月 ア ル 毛 を ま か く と あ ハ も そ ひ ば う ら か き

月 十四 秋 の 夷 月 ア ル 毛 を ま か く と あ ハ も そ ひ ば う ら か き

月 十五 秋 の 夷 月 ア ル 毛 を ま か く と あ ハ も そ ひ ば う ら か き

○ か る お き の か と

古モ うきよをくらへてくはのをもくもくとまくわきと津波  
曰干 畏ハ矣れをどうれとみ株葉乃立也とびに秋のきの  
はくと美榮にいとあ。もべの葉みはくとふとハラリ。まくと  
かしつ。おまかどにちやうとまくとまくとまくと

○先かと

古サ ふけめかくものひ乃まくじぶ人のまくべくまくと  
五度 まくばくと下ゆくとまくとまくとまくとまくと  
あま はくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

○祭

古セ まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
四六 まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

○かや

五十 正かくべきとた や まくとバ加まくとわが浦ノハコをぬあく  
小矢木 なづりせでらを名ノととバ郭ふをうりてくまくと  
○おも歌十八九 嘴花のいもくかやあかひつ人のいとくふまく  
秋葉方考ノ秋のいもくかやあかひつ人のいとくふまく  
山ニキハウカヤをほせすらそかや。や。神木もしん  
香やうり辞りハラシ

お七 あふと や うきのをかとハカリてくわくむをまく  
源氏 あふと や うきのをかとハカリてくわくむをまく

○むのを四

○五三

○あともやとつア鶏は今よ戴た三がなまえをどももも

○何ちかトふあくか うも 次の何のひりかせり

○うかねきのがく ふの毛かかはれよ生葉

○あそびの猿のあうき か 五の毛らその辺にかま

○あうき うかば 二の毛らの辺ふみさす

○あかじ あむもの珍ふせり

### 何

○なふ みど あぞ め代 もが いふ いぞ いづ いづ

○何の辺とも。あり。此まに何ちくらす。件の辺どとをも。かと縫の頭ふ何と奉  
うる。三度の猿の猿の猿のいづとも同ドく。中がの邊くみ縫う。一の毛ア  
あせう三物傍うちぬし。まの邊あは。左の縫うちの肉。いづにもまれむつ縫を  
ぬき。まみ手准へ。此の肉あは縫と。みま口筋乃縫べとねべ。

○何の下ふかくかか

○何ちの縫をぬき。まの下の猿の猿の間。かりぐくまくと事だかわ。

○なふかくくらん。まくうきうき。ソウキムかんをどうか。文美ふあふうと  
なぐれん。いつも書け物をぬく。うどのぬく。かくふりう。まくじかく。わの  
あく。何ちか下にやがくつきてをあき。えもばくもふる。あふきう

か人のうらへにみがまくをかみされさんあとのや。かまと曰。

五十三

レレまでみとうねる人のうねる。あらうの秋乃むよまくん。

四

たゞぐれそりわきが宿をもとぬる浦そやどり波あつ

かわうに宿をあらぐ句をへとくとれたり。さうとくのうめきにあらびて。  
かくべきあをあさとまくらひおまうせていつとあもくあくすすみへ河く波。

あれをあきらのとうへかくぬあたあもくほじゆくとたおむ。

五  
三

けあをまれるのぐゑそ△メヅリ△ちぎり△あらん宿旅立を

五十四

あくまきあど△又と△新のあかくんをふくても月ハツテキリ

五十五

かくまだるり会お君のいくつうちぎり△ひまかに仕あめま

五十六

いくまくにゆれ△あどうくつらうつきの麻足のほのかひでまくとき

五十二

神安月みけらをあうだうにせばくわが里のるふやど△かくす

五十三

え代乃春おみ日アリ出でるんねといく度。れむ△かくす

五十四

おぬりみうきはの小せうとみがとくめん△おやえん歌う一にして

五十五

件のうごものかりトハ皆ううづ△のき一はふぶくべきとあるを。△ふきぐ  
きあふせん△かくあまくて下にあた。極もいづきもすよかく。後事は例ま  
きのべきだあくど。後撰せざりうした秋うととくんかくうききのふ乃  
お祭まくはをけりハト秋うといは詩う。上のあ△みハカリねハ別うし

五十六

又あくろあくろをあくろハもと△一△いつ△ういつ△ういと△

五十七

うとい△ハ△とももやとめう詩う。△うあホリもまういつ△ういと△

五十八

追き世はる。ものめく何ちのでへかくかりトを借りて。やとひそられ  
かく。あをうしとう人のがくんと△みべきを。△ふをうしとや人のがく

五十九

んとひ△あぐまくとうあはとのまん△みべきを。△がまくまやあを

きのまんこやうにとむれり。までかくあややとかくハ若がてこそすまうる  
らぬこの道はよけ得りまし。さやかとじがきをすくやといひ。いうも

ゆゑふうとくべきま。いわゆゑかやといひ。ともとふうとくふくま。

とすにと數をもつて。人の文ハけ得りうるをき。今の文ハ文よ  
くかくと見るも。まづくじ様を觀へ事はか。とて何もの下よハやとい

ふくまく。皆かうりとくばべ。後撰一章あいみぞ。ねやあらやんまこと。ハいふ  
とまく。人の手。やまが。月のまく。人。こまく。せば。のぞ  
のひもと。及ぶ。民も。おだき。これのどろきのまく。を。人を。いふ。志。おや。こ。お  
そいかして。望。やう。ト。始。く。こまく。あ。と。まく。と。まく。まく。あ。お。ぐ。ふ。書。書  
まく。に。まく。ハ。度。の。衣。く。まく。の。被。件。の。浦。の。波。や。まく。ん。ば。や。う。ト。ハ。強。り。り  
但。一。あ。ど。や。う。そ。や。い。ふ。ぞ。や。い。づ。く。ぞ。や。う。そ。れ。や。い。う。き。や。る。ど。ど。  
別。一。の。様。う。そ。こ。ま。の。様。ハ。皆。に。の。か。一。ま。で。の。う。れ。う。だ。え。や。う。そ。や。う。そ  
や。う。そ。や。う。そ。り。あ。一。ま。で。の。う。れ。う。だ。え。や。う。そ。や。う。そ。り。を

上りふく様も。うり色も。やの。お。り。と。き。う

○物語集解

後撰

十

手すのう。り。く。と。か。く。ま。せ。い。づ。く。う。れ。う。そ。り。う。浦  
一 い。う。ね。ま。か。う。山。を。か。う。花。を。い。く。へ。乃。あ。と。お。う。ま  
曰。古 ち。と。か。海。お。榮。な。が。紀。な。大。井。川。い。づ。く。う。れ。う。そ。り。う。浦  
唐。美 あ。く。と。お。川。ト。神。あ。を。お。う。そ。り。た。づ。タ。ま。と。お。う。秋。う。芳  
後撰 ち。う。き。と。ど。あ。み。え。馬。す。ま。を。ハ。ま。げ。ま。す。和。と。の。ま。よ。み。絆。と。あ。を。バ  
後撰 い。あ う。れ。を。あ。み。よ。か。う。と。の。ま。よ。み。絆。と。あ。を。バ  
後撰 い。あ う。れ。を。あ。み。よ。か。う。と。の。ま。よ。み。絆。と。あ。を。バ

金文

いろだうり神もみわとみうき山ニ累比まぢよせん

日暮

内八 やくまとすゑをちゆくめいゆきどいづハちあくらす年めと

日暮

内八 いくくうりほじと人をみみせのうそしをく幸かくん  
考に たきをもせりちねふ乃女やむ秋と葉見る人をけんし

内八 大クシ秋の神をめあきハキタタケ神おうり月の月

日暮

内十 月ぞまじたとろはあくにまのふや吹上のふるむくらりなくし

日暮

内去 いづくあることひと宿をかりてうしむをゆふまはまの行ヒキ  
内去 なまつてえしハあざりぬまぞとあどま川の流れ下流

不知

内去 いづくゆまてよあはありぬのつきせぬぬをいとくらうと  
内去 あよふきくゑがきひつういまはねまうくんぬをひづくに

万九

萬のうへ乃は詔のひゆ秋はべりきまき後ちをたきよぶくる  
○金葉三月のあふものあくはひきてま津乃ま月めまくん。これ  
難波をやがてかくす舞よつひりけくの様

○切々何 ほのまうきう

後十三

れりあすあとおをいづききつうか。ほうにぬと思ふをうか  
後十八 いきくう志やく。いづきありやどさくよひくの様

保氏

いぢや あそ 段うくぬきふくを人ふまき下ぬひからき

又下にかをくをくすくまうきう

後十三

よのうのめ人のううげまくとくねばきくげまきぬべきあを  
後十八 もくすりあがだきく

○ものかふいづくとくひてかくおう。まくハ下ういづくの候。一計小  
みせき。又や何と上よやうだわ。ハの事やのがよおせり。

○かのき

○古六

○ 仁を主ゆる様

後大 章一多 **いふ** や **いふ** 風の事體はあものまほりやかぎ  
後八 上のあう候うくりひくのもとへ **いふ** や **いふ** ちんとまん  
本 純生 此在をも後主を **いふ** **いふ** せんりえんりすもむきがれつ  
あまくとてにまゆうきり  
まく

後六 おにこぐわーかと小脚のうーもて **たき** **たき** とうあはせん  
拾二 ありひーほ人も者なし中城 **いつ** **まいつ** とうまくさん

后三 おが金どかあまうぢねるすと **たき** **たき** まくさん  
后又 **たが** **もうふ** **いふ** うてばうかくとちびはよむ夢めくし  
后八 **いつ** **まき** **いつ** 号をべきあとゆきハ波のよよごで人のまぐん

日十 いふ して **いふ** おせり方りへをうかび おぬをかりもぞくべき  
壁五 あふ ざき **いふ** あふとあれどもたりとかきうな歎乃ゆくべき  
后四 そりくへお人を向ひて **いづ** **うん** **いづ** の日かうすとまふるん

又お別へてまゆうきり

後平 おでうへるを **いづ** **くまらひ** **いづ** の、おれくまくといもき  
後九 そりかくに **いづ** **く** とおきもおまを **いづ** さとせん時あくまく  
壁六 **いづ** だりりえをうかきて歌くさん **いく** まわらをあらむきよ

○ 廣田社う金ノイ **いづ** とおきもおまを おまん老あに花ハハつらへべき。  
後革で判ふくとくつとくまると難せよハく。まくとくまくハよく。  
くくべ。凡教二ハもあきこむ乃とくおよとくもいきあらうがハく。まくとくまくハよく。  
日十七 **かき** いんいつのゆべもたまうをんまくのとくがきぬのをとく。  
らをいづくへくよ。また。  
アホまねべきくぶつハよ。

○色とあら様

山桜落びよかひ

古ニ

かきつてせうひてそりつま事お肉ふ喜ハ

いづくとわじととへぞ

月十三

うを取れやこ乃うつはそとうる美ホ

いづくとまくにけり

月大

いくよくも何トトとお方をとぞまく

うふとくひをかりな

月云

ま川おもへーおなとばまのせむとくあも

うふとくひをかりな

月屋一

いつま月見ぬ秋まなれりをもてことひのたびにしき

うふとくひをかりな

月屋二

うくおもはきハまくめとお戸のやまと施みたまふんせき

うふとくひをかりな

月八

うべーまふど次立めてあくしとハ

いづくとほド軒乃タ善

月九

たきがよきとが母もとくぬよの中にまわわとくうとくさん

うふとくひをかりな

月足

月足日ばたきとしもなぐさまぬ映井山乃ぬりをうねど

うふとくひをかりな

月  
古

いづつとくきく地と人乃おりすんあなえずおまくのやの

うふとくひをかりな

月  
九

うくむむーたがいづつとくきく地と人乃おりすんあなえずおまくのやの

うふとくひをかりな

月  
七

うくむむーたがいづつとくきく地と人乃おりすんあなえずおまくのやの

うふとくひをかりな

月  
九

うくむむーたがいづつとくきく地と人乃おりすんあなえずおまくのやの

うふとくひをかりな

月  
七

うくむむーたがいづつとくきく地と人乃おりすんあなえずおまくのやの

うふとくひをかりな

月  
七

うくむむーたがいづつとくきく地と人乃おりすんあなえずおまくのやの

うふとくひをかりな

月  
九

うくむむーたがいづつとくきく地と人乃おりすんあなえずおまくのやの

うふとくひをかりな

月  
十

うくむむーたがいづつとくきく地と人乃おりすんあなえずおまくのやの

うふとくひをかりな

居士 たぐひ乃まおれ業あきあらむの いつ うべへそとるまうす  
角七 とかたをうへくさき人をばもとめ うふ のつまきまもやねえん  
詩和 みはとのまけゆくて乃ちうめうたが 里うちの梅のまども  
凡十 故事 人一ときどくあらうとすへてと うふ のうひきくせなべきう節  
○一つの何 いづかげりかくま  
古吉 みちのくのまふりらむり なき ゆあふまきとらふまきくへ  
内 ほのまち ちふ といふりとばふへろせまふまくんでとをのまくを  
内 みちのく ひづく もうまと詫がぬは浦へおひつみてかまくを

五八 いづく あをなまきしにせん郊みよしへ乃里にみよのとぞく  
四十七 梅巻 いつ たをうへじとひまゆりとしきみさうじとハ情きき揚ぢをと  
此格ハ、まことてよぬよ對へて。まことまぬ也の情を何とすも。古き古のう。思ふ人  
又對へて。も代の人をもまくとひづく。君をかまく他の人あふふまくとまふある  
らかくにし。又對ふをもまくへ。まことにまんするをのまくを思へ。まかのうりへ思ふだも。  
ひづく行はとどハ他の人とあまどうり。ひづく行はるきとくにまんも。他のありと  
あきもあふまんし。ひづくを思ふと思ふと。他の行はるきとくにまんも。他のありと  
ひづく行はるきとくにまんも。行はるきとくにまんも。他の行はるきとくにまんも。  
左の條くハ何の處の釋。ちのまへてにまく。格ぢとし。一つの釋だま  
かのくまくづかまく。格ぢとし。一つの釋だま

○ ちふ

● ちふ

○ 五のと四

○ 五九

古十

竹ひろひばよきとまきれみせ川

**あ**

ふふみうておひそめきん

後九

ゆふくわかくまどとはうちあらうむけをぞくり

**あ**

ふよきとまきり又おやたとんまくすぶひのおと見とハ別

○あふせん

古十

竹しませかとえもあ

**あ**

ふせんふえてもんのうぐまくに

後八

ゆふせんふへとのみををかりしきんふまうお巻をがづくほじて

こまはせんくわくうをゆく。そなまくは切。ほ機うるハ切。うるハ切。うる

○あふせん

桂十

竹ひもきん風と

**あ**

ふせんじまく日付あとを今とまくやま

○あふせん

新和十

竹さざ川せぎりにむまくまの床乃のよき

**あ**

ふしにゆくとめきん

○あふせん

新和七

竹さざ川せぎりにむまくまの床乃のよき

**あ**

ふしにゆくとめきん

○あふせん

新和二

竹あくわくうをもとめきん花りてもやをもとまく

**あ**

ふくわくとめきん

○あふせん

新和二

竹あくわくうをもとめきん花りてもやをもとまく

**あ**

ふくわくとめきん

屋主

美咲がとをうねきぬとるりあとうふそ人ヨウヤトアフル  
堺川さかいかわもうねーヤエグよとのどりもくときうふそ年のうきをいそぞ

○うふそ

考古うかこうた人乃用うふ

そのゆもとそとふりもとがくもうちはがくつ  
けぞハタケドリ。程三の毛ののれいくその様うくへりて  
○三葉みはハタケたけとくらへりてまし。えうおどれどおあり。くわくちをひ葉はとくらへりて

○一つの橋

金又

せ際さいひまをねねもきみうしを。ほきせまどゑうゑぢは代め  
藤原光

志しが代だいのねねくべくべををささく。すあめ候まのま砂さうりうり

公室こうしつ

志し

青あお

ううふ

むむかかりりももききうう。よよののははむむととうう。ばばくくも

海かい

ああいいててののううののまま。ううききばばもも一一月げ日ひももううふふううふふ

○あふそと 三の毛のの近ちかせり  
○あふまや はせやの近ちかせり  
○なふかや はせかの近ちかせり  
○あふまくとくらじうね 二の毛の交換こうかんねねー出でせ

あのかあくあくす

●など

○下しにからからきあく例た。あくくととははきき事ことのの下しに詞ことをを  
どうどうふらふら倒たくくてて。後ご撰しゅん七しちををうに秋あきととりんりんききははかかははどどづづみみ辞こと

○ひのきで

〇足あした

〔後撰〕 あどてかくきぢくさんかぐだうりのどうふそまつ月も行ひ世ホ  
千三 あどてくくありひそめきん部ふきはみやうのは乃ちあうは  
金せ 費 あどてかくりかくくまみうにあんあくまことむじいわを  
〔後撰〕 こまうりてきゆうり  
又てかくといすハ

後撰

みちよへとなりけりわを 〔後撰〕 あどてくほりうーももくもづをそめ

○あどや けまやのわち出

あのかあと引てな

● あど

○下かかりをかく例

○あそき

古土

かくそ火ノ一河ノな里ノの〔後撰〕 あそきかくほのあそくはり

金セ

あそきかく、ひちふたちてあや先業あきりちくもみ月うる

〔後撰〕

まほの院みあ人乃家ぬよまくを毛びかり 〔後撰〕 あそ

あそきとハキヅレ

○あそき

此まやのわくおせき

○あそき

みのまとのわくおせき

お内かくまくあくわく

● まれくあ

○まのを

○一つの核

古吉 みちむくのまづがうらぎとたきゆきふぞもんとあめくさく。

佐四 まのへとたきあくすくに郎公かりひのかにあうばうからん

お十 あづがふとたきゆあくすく。あされを今ハあふはるトへどさん

古四 たが秋アラシぬ月の山名女帝をさだまつてうつみ

内主 あいあうばたう名をだら一安中めのあきあくらひあもうと

万七 ちうひとむれありよとせきふたりたがとめそに今あくよ

万七 ほきーもけきやまき宋たがとあふ年もかとこわが心もあくに

内主 みかどにあづくまたがゆふかつうてこがふとくとく

内主 たーちうね波菱笠をきゆーー後トたがきん笠あくよ

内十二 里人をかくりほぐかひトあやーとてもあくたが名かくよ

あ筆みハ強かり。は核イ上よみせトたすくみらのくはづくへあきくとくくら  
じのあと同じとあること。トきトくべくして。申よとまきかふ御よみて  
うにせり。まきハアムニテハアムニテ。他のへをうそトたとたがとくよ。

内十二 かくりあくよ

● いふふ

○ いふふ いふふ いふふ いふふ いふふ いふふ いふふ いふふ

、うふしんみぢトく切きトうとく

お六 ほみだりうトまくまくトいわくえトいわくえ

かまぞトヘきくハ

古六 ひうあくんトいもやの中にまばせ。まけうたとまくらん。

○ まのせ

○四三

○ 終ふきのいふて

後代なるかをぞとつうをまし

〔後十〕 和みうつみやくまくまくいふてれあどひうりん

〔内而〕 いふてかくらあてふあくまくまく人ぼてあしでゑふかくらん  
ねふきてあくまくまくんほそきすながきお下にあきばうひか  
ねふきてあくまくまくんほそきすながきお下にあきばうひか

〔内而〕

○ いふてや はまやの終身やの像よぬま

お乃和あくまくまくまく

○ 下にかくら落たく傷む

〔内而〕

○ いふて

〔後十〕 いふてせき一もけふのまくまくのまく一もくまく

〔後十〕 りのありまくいもぬぞうりハ無ふうといふてそまくき種めあづくを  
かくカめくとてもをあでとづく

〔後十五〕 いふて

○ 下にかくら落たく傷む。いふてかくら落たく傷むのまくまくが 則除

○ 終ふきのいふて 俊ちふきふとくいふて山猿猿びゆやくべ

〔後十五〕 いふて うおきりもせぬくもとくもとくもあくまくもあくまくとくもとく

○ 間のを

〇四十九

月十五

いそ

うかがひそりひそりとすてぬるに福ふそんとぞゆ

月十六

きりりあくば

いりでみやこへ告ぐんとゆい乃軍をあらゆる

月十七

あといへぞ月一のあみとぞゆくを

いそあめをくようせん

月十八

まをとふ

いりでかくそふそとがおもてゆうよのあくせん

月十九

いそ

あいのうれむきかくくへきとおりてりあはとへな

月二十

みる人の

いりでとわりとよしにまたえーとをとへのうらか

月廿一

いそ

又かをほてらすとす

月廿二

いそ

あくとおきとよしにちをとせはむくらへぞうけうり

月廿三

まほ

いりで色とやふわくじりかのれ井とうと根をくねくね

月廿四

いそ

うすいをなごみては乃ままでおぬをゆく

月廿五

いそ

おのれをくらむとよ

○いづ、いづといづちいづといづ  
いづといづまくわくとくさぢむし格 二はもまくの物出さず

いづ

のを西

四十五

○まくろいづくは皆切き様子下へてす側をかく法ぐきくよしむすめ  
古十七 ふくよきは小がをや。いづくこよみぎの聲乃派を、要する物ふるう

後十七 ゆくちやにあら。いづくとまちをやいつのとてお處といまし  
いさあはいきへ乃あかひも。いづくはうむこときかくとくを成ふらうの

古十八 よの中うりいづく。恋事のとてかーじまわらやいそんあるうるいん  
新十八 いあづくはうるまよひもきりうりいづく。れのみみけしりうりう

後衣 きのねうりいづく。いづくはたのせやこれ。人ののむすびもすくも有られ  
ヌトノロをみてまどり

古十九 むつごともまづつきうくおぬえをもいづく。船の事一とよハ

後十 ともかく色いよまは葉のうしゆういづく。あのかくまくハ

金八 うふみてふねをうち浦りきくめどいづく。ちにくすやの里

右の手あと歌ふう歌へ

●いつ

○いづくかくよみがくといふこまくをもゆすて。一ハヤニウ舞を

見ばくとハきこ。舞きよ色後世よ。いづくとくへ。別か一つの音ねくあれ

後一 ねをむきやうきつまくあくよ。いづく。こううやとまくん

後十九 いつくもほくまくまくせまんつまく人乃なべの般さん

古四 ろくまくは今こん年はきのあまき。いづくとのむすり聞づべき

後八 いつくとみのはうくとく年はくとく年はくとく年はくとく年はくとく

内九

いつへう。わがまにふねうへとてあゆみるはり。神ノ命

ねじ。わがまにふねうへとてあゆみるはり。神ノ命

内十

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

内九

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

内八

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

金一

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

内八

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

千士

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

内三

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

内四

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

内五

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

内六

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

内七

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

内八

いつへう。とまくまつたをそく。まくともうかうり。地

牛のまごとのへづくハ。ソルクーと能ミシ

いじて。さだまきことえしきてくわざくらハシグモ。いくハ穎ひの詩  
あきだ。いくか代きのうりとへいぐか代ぞことか代のねを問へば。い

いくか代ぞとしへ。色もそえしきてくわざくら。とへいぐか代あわ。葉の

差とりひて。はいくの詩うるうど。へいぐか代をかおへといへをよろしき。玉べ

て。いきうちをよくおねまへて。ほうべき詩あり。千載三[月]うちうりゆうたきみけ

か葉をかゑれ。うつまく。とがめく。せをきの日も。喜む。うきまく。うきまく。かくまく。うきまく。と  
のうひて。まくの月ねのう。うきまく。うきまく。やすよ。かくば。又風雅ナモ。うきまく。うきまく。かくばと  
て。とうや。うきまく。五千の葉のいくな。あ。ことく。うきまく。うきまく。うきまく。うきまく。うきまく。あき  
き。いせまく。うきまく。まく。うきまく。うきまく。うきまく。うきまく。うきまく。巧あらわ。

○いぐそ 三叶光ぞの詩り出せり

○いく葉称ざめぬの詩。いの葉びへゆる。多くにゆく。二の葉を。夏秋。繁生せり

右叶が。とくなることある。



